

# 猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編

⑤

田宮 治

## 苦戦の小猪

あれほど苦勞して訓練して、一生懸命頑張っているというのに全く駄目である。駄目な原因が、戦って負けたとか、逃げられたというのであれば仕方のないことだが、猪が全くいないとなれば大問題である。

しかも、昨年は毎回猪が飛び出して良い戦いをやったり、大きな成果のあったホームグラウンドだったので、そのショックと不安は大変なものである。

気合を入れての今猟期は、まさに出鼻をくじかれた格好で、私は大いに焦っていた。何ともおかしな猟場の状況に戸惑いながらも、犬が悪いのか、猪がいないのかを猟場に立って必死で考えた。どう

考えても、犬たちに原因はなさそうである。

そのことを証明したくて、山梨の慣れ親しんだ猟場で一人黙々と犬たちを引き込んでみた。いつもどおりの文句なしの止め芸で、七頭もの猪を見事に止め切った。ライフル(06・ツァイス付き)での遠射ではあったが、納得の撃ち込みもでき、何の問題もなかった。

やはり、千葉の猟場には猪がいなくなったようだ。山彦会千葉支部の支部長の北嶋氏も、真顔で「いないね。おかしいなあ……」の連発である。

それでも諦めきれず、ホームグラウンドの山々を隅々まで狩り込んでみたが、この日もとうとう猪は出ずじまいだった。昨年は一秋を通して、犬たちの鳴かない日

などなかったのに、どういうことなのか。そのあたりのことを、私はあえて問題提起してみることにしたのである。

さすが、成長盛りの山彦会千葉支部の若者たちである。それぞれの思いを忌憚なく発言している。そんな意見をまとめるように、北嶋氏が「一番期待していたホームグラウンドは、もう駄目だね。他の猟場を探さなくては……」と、なれた猟場を諦め、新天地に望みをかけるような提案をしたのである。

「そのとおり、猪がいないのだから仕方ないよ」と、私は言いたかったが、ここは黙って、すべてを親方としての北嶋氏の意見に従うことにしたのである。

当然のことだが、猪猟法や犬たちの芸のことで猟にならないとい

うのであれば、やり抜く一手を編み出して道案内する自信もある。しかし、大切な猟場であっても、狩る猪がいないのでは、どんなに考えても打つ手など何もない。「よし、一緒に探そうじゃないか」

こんな時のために私が常にやり続けていることがある。それはこの猟場に出た時でも、必ず隣接する山々をよく見ておくことである。

北嶋氏と出猟した時も、猟場の見晴しのよい大峰から見える山に目星をつけていた。

「なぜ、あの山をやらないのか? あの辺りから犬を入れれば、必ずあの小沢で止まるよ。山並みも良いし、猪も必ずいるはずだよ」と、いつも言い聞かせていた。まさか、こんなに早く大峰か

ら見た山が獵場となるとは思つてもみなかつた。

北嶋氏は「あの山は大沢が何本もあり、同じような大峰が何本もあつて狩りにくいし、猪が獲れたとしても運び出せないよ」と、不安そうだ。

私は、ここは千葉の山でも、猪山の山容を持った数少ない獵場だと惚れ込んでいたので、「北嶋さんよ、猪さえいてくれれば必ず獲れるよ。あんな山並みでは獲りづらいから誰もが敬遠するが、犬たちさえ良ければ狩りやすく、なれば良い獵場になるものだ。猪が獲れた時の苦労はその時に考えればいいよ。これからの獵場は誰もが敬遠するゴルフ場周りとか、攻めづらい所がポイントとなるよ」と言つて説明し、納得してもらつたのである。

元々、私が千葉へ出獵することになったのは、仔犬の縁でこちらに來た時に、猪が多いことを知つたのがきっかけであつた。

どの獵場にも他では見られないほど多くの猪の掘り跡があり、狩るたびに猪が列をなして飛び出し

て來たものである。

おまけに、低い長尾根を何十人も狩るので、上手な射手の所に嵌め込めば四、五頭の大獵果となつたものである。それがわずか六、七年で猪が激減しているのである。この現象は関東全域で起きていることでもある。

十年くらい前に群馬や山梨で疥癬が流行したことがあつた。箱根が急増した影響だといわれていて、そのため猪山はシカやカモシカに占領されてしまい、良い猪犬でないと、猪だけに絞るのは難しい状況になつていたのである。

千葉にも、とうとう來るべき時が來たのだと覚悟し、私は初日から悩んでいた。

千葉では増え続ける猪対策として、畏獵師を三倍に増やし、畏獵を年中許可していたのである。銃獵駆除も同様に毎年やってきていたのだが、何と二年続けて人身事故を起こしてしまい、一気に畏獵の流れになつたのも致し方ないことである。

千葉県に猪が多くいることを知

っているのは、関東の猪獵人でも少ないと思うが、猪が急増した理由は、どの山にも人を寄せつけない崖と大藪があり、猪の食料となるシイ(マテバシイ)やモウソウチクが他では見られないほど多いことである。

このために、猪獵人は戦いづらく、また山が低いので、麓には必ず民家があつて犬もいる。民家の犬や低く止めづらい山の悪条件をうまく具合に攻め勝つて、大藪の中で愛犬たちが猪を止め切つたとしても、大藪に踏み込んで撃ち獲れる猪獵人などもないようである。

大藪の激戦に恐ろしくて入ることができなければ、当然のことながら、犬たちは討ち死にするか、大けがするだけである。

そのために千葉では追い犬猪獵が主流であるが、攻めづらくて獲れないのと、年中温暖なので食べ物が多いため、猪が急増したようである。

しかし、畏獵になると一変する。大藪であっても山は低い所で、その山の下には食料となる畑

や田んぼがある。そこに箱根が仕掛けてあるのだから、獲れるのは当たり前なのである。

そんな情報は、山彦会の相談役の平野氏から十分に聞いていたので知つていた。獵期前の駆除期間に何十頭もの猪が箱根に掛かり、少なくなっているなどの情報が入るたびに、千葉県の猪獵も厳しいことになるだろうと予想していたが、まさかこんなに早く現実になるとは思つてもいなかった。

昨年は確かに大猪がよく獲れていた。大猪を交尾期に獲ると、ナイフで切つたように身体中が傷だらけになつている。これはメスを争うオスの勳章のようなもので、強い大猪が山々を隈なくメスを探し回つて多くの仔猪を作つているのである。

こうした大猪は犬も恐れられないし、畏などには決して入ろうとはしない、いわゆる歴戦の兵である。そんな大物は犬に追われるとすぐ止まるが、そこからが恐い猪の反撃が始まる。並みの犬では簡単に撃ち獲れない。どの山でも、犬切りの名物猪として必ず残

っている。本来は大切な種猪であるので、猪猟の存続を望むのであれば獲らないほうがよいのである。

名物の大猪は犬猟でなければ絶対に獲れないのである。箱罟では決して獲ることはできない大猪だからこそ、犬持ちならば、われもわれもと挑戦し、大猪との対戦で犬芸を確かめ、磨いているのである。

説明が長くなったが、そんな大物を昨猟期にたくさん獲ってしまったのだから仕方ない。私は猟技術や犬芸を極めるのは、大猪との激戦以外にないと思っている。

食うか、食われるかの真剣勝負に打ち勝つてこそ、真の猪猟の醍醐味が味わえるものと思っている。山彦会千葉支部では、その難題をやり遂げたのであるからそれで良いのであるが、今期の課題をどうするか、まさに頂点を極める試練である。

### 止め猪は度胸で撃て！

「よし、よし、俺について来い。

必ず代わりの猟場は俺が見つけてくるから……」

そう心に決めて猟に入ったのが前面の大山で、いつも猪が逃げ込む難所続きの猟場である。

「さあ行くぞ」と、今日こそは何としても必ず止めてみせると気合を入れ、八時頃にシロ号、マロ号、ヨシ号の三頭を放犬した。こともあろうか、昨日に狩ってタツを見事に突破された同じ猟場を、全く同じタツの配置で強行したのである。

山彦会千葉支部では北嶋氏をはじめ若者揃いなので、出猟は土、日が多い。長期間獲れていないので諦めムードも漂いはじめていた。

ラッキーボーイの加藤氏は、紀州犬を使っている千葉では名のあがるグループに出かけるようになっていた。若いのだから行きたい所に行つて、猪猟のやり方を学ぶのは良いことだが、どうせ共猟するのであれば、もう少し腕を磨いてからにしてほしかった。でも、今の状況では当会に自信が持てないのだから仕方がないのかもしれない。

私は原因がはっきり分かっている。私に決められると思っていた。北嶋氏には「焦るな、大丈夫だよ」と言い続けていた。全体的には、これも頂点を極めるための良い勉強であり、大事な試練であるといつてもよい。

加藤氏は山彦会の事務局長としてこの先も期待しているし、すぐに当会の実力を分かかって帰って来るだろうと思っている。そのことを証明するかのようになると、本誌でお馴染みの射撃の名手の方や、名のあるクラブの勢子長までもが入会の下見に来てくれるようになった。その方々には今期の目標もさることながら、まずもって犬群の自慢芸である得意の咬み止めと、自信の刺し止め撃ちの極意をお目につけた。

北嶋氏にはそんなことは何も言わないが、「止め猪は度胸で撃て！必ず銃を身体の前に突き出して、いつでも撃てる体勢で猪にゆっくりと近寄り、撃つ時は必ず

肩付けして、よく狙ってから引き金をゆっくり引くこと」と、全員に教えるように話している。昨年あれだけの激戦をものにしてきたのだから、言うことはないし、よく分かっていると思う。昨日、射撃の名手が張ってくれた一番タツは、絶対に突破されないように新入りの板東氏（六十六歳）とベテランの平野氏にお願いすることで、このタツで必ず決まると思っていたのである。

この猟場は大きな峰が犬を入れるタツの字になっていて、外側に大峰がある。つまり右から攻めると猪は峰伝いに左の大峰に回り、タツに嵌まる作戦であるが、そこを切られれば遙か先の県道まで続く大峰なので万事休すである。

十二月十二日（日）、平野氏、板東氏、北嶋氏と私の四人で出猟した。その中で二人をタツに置くのは、この山の猪の逃げ足がどうもおかしく、いつもの年では考えられない速さで、しかも遠くまで飛ばからである。

普通、このように猪が止めにくなるのは、追っ掛け（メスをオ

スが追う)が始まる一月中頃からである。最近猛暑のせいかもしれないが、年中交尾期のように、猟期に仔猪が当たり前のようになっている。猪は減量しているので、逃げ足も速く、止め切れない。さらにオスはとてつもなく強くなっているのである。

私はこの原因を突き止めるため、土、日以外は山梨に出猟して七頭の猪を実際に撃ち獲ってみた。その肉質を検分した結果、メス以外は赤肉だけで脂肪が少なくなっていた。これが実戦での強さと逃げ足の速さになっていると気付いたのである。



大峰こ大峰こ犬芸の見所、網で寝屋まで引き込むようには自由道案内するようには猪に行き着くのである。網訓練は先頭に行くカツ号。大峰こ犬芸の見所、網で寝屋まで引き込むようには自由道案内するようには猪に行き着くのである。網訓練は先頭に行くカツ号。

ただ、山梨では猪がどんなに強かるうと、山が一〇〇以上ある大山なので、犬たちは必ず谷で止め切れるが、千葉の場合では大峰といっても、せいぜい二〇〇山であり、おまげに大藪が付き物である。その中を猪が突っ走って来るのだから、並みの犬たちでは

とても止められるものではない。何度も追ってみて、止まらない原因がこの辺にあるのだとようやく分かってきた。このまま逃げればなしではまずいとの思いで、同じ猟場に同じ犬群を何度も投入して対策に努めてきた。その甲斐あって、止め上手のわが犬舎の咬み止め犬群が、追い犬にも負けな



シロ号、武蔵号、ブイ号。山梨の猟場は頂上は平らであり、そんな場所に猪がいる。車から網1本使わずに1000m以上の山頂に攻めている時でも、犬群はきちっとまとまって動いていることが大切である。当然のように猪臭があれば、一気に飛び下りて行き、「ワン、ワン」「ギャンジャン」の谷落としが始まる

いような、どこまでも追うことを覚えたようだ。

今後は必ず追って行った先で止め切り、激戦を繰り広げるに違いない。そうなれば、いつもどおり追って行き、止め撃ちをすればよい。そんな考えで、私は北嶋氏に「どこまでも犬群に続いて先手をとって戦わねばならなくなっている」と告げていた。

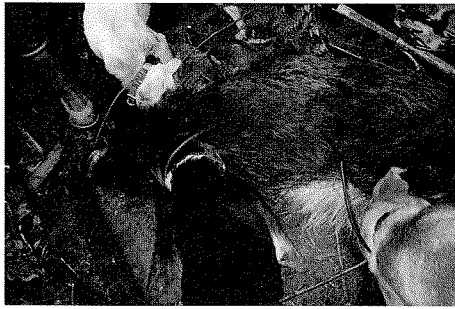
幸い、今猟期からGPSを活用しており、犬群の動きが手にとるように分かるので作戦が立てやすくなった。

「北嶋さん、もうそろそろだよ。昨日、マロ号がこの大山を追い切って、一番奥の辺りで追うのをやめたが、今日もそこへマロ号が突進している。まだ十五分くらいなのに全犬戦闘モードである。飛び出して来たのは、四頭の小猪と親と思われる七〇ポくらいの子猪である。

北嶋氏が早くも、「タツ注意！出ますよ」と檄を飛ばしている。その言葉を合図のようにマロ号が一直線に走り出した。北嶋氏は私を見て「もう猪が出てくるよね」

(右)がっちり猪を咬み止める  
シロ号、ヨシ号、マロ号  
の3頭

(下)マロ号が咬み止めに入っ  
た瞬間。猪との対峙の時  
に見せる力強い射竦(い  
すく)め芸から、突いて  
出て来る猪に見事に咬み  
を入れたところである。  
この芸は猪犬の最高芸と  
いってよい



と言うので、「またしても早立ち  
で、どんどん逃げているのだ」と  
告げる。全く昨日と同じコースで  
タツに向かっている。北嶋氏は  
GPSを片手に「タツ注意！ 行  
きますよ」と怒鳴っている。

「よしよし、北嶋さん、平行する  
こっちの出峰を犬たちに続くよう  
に追いましょ」と、来た道に戻

### 苦戦中での初勝利

るように走り始めた。どこまでも  
犬たちを追って行き、犬たちが猪  
を止め切ったその場で勝負する作  
戦に切り替えたのだ。

タツに向かって直線的にどんど  
ん近づいて来たマロ号は、篠竹が

一面に茂る大藪の中を何事もなか  
ったように、二枚も張ったタツの  
上を突き抜けた。何と浮き島のよ  
うにある、真ん中の大峰筋を鳴き  
声一つ発せずに凄く速さで通り過  
ぎて行った。

手前の大峰から先回りして、犬  
の動きに対応しようと思っていた  
のだが、打っ手がなくやきもきし  
て様子を見ていると、かなり先の  
ほうに見える大きな杉林のある小  
沢の辺りで止まっている。飛び出  
してきた猪は三頭くらいで、ヨシ  
号とシロ号はしばらく追い鳴きを  
しながら、タツの手前を上に登っ  
て行ったが、県道を突き抜けられ  
たので戻って来た。

今日、どの犬も鳴かなかったの  
は、早立ちで姿が見えなかっため  
である。藪の中を逃げの一手の小  
物がいると思われるので、いつも  
鳴きが途切れない犬群にしては珍  
しいことである。

昨日は寄せ鳴きと追い鳴きで追  
って行った。ちょうどマロ号の止  
まっている所からUターンするよ  
うに追い戻して、またタツの上を  
通り過ぎ、今日起こした所まで追

い続けていた。  
今日もその辺りまで峰伝いに飛  
んで行って止めるだろうと思いな  
がら立ち話をしていると、マロ号  
が中峰筋をどんどん戻って来て、  
真向かいまで来た。

追って行った同じ道を猪が戻る  
わけがないと思ったので、大声で  
「マロ、来い！ マロ、マロ！」と  
怒鳴り、呼び戻しをかけた。マロ  
号は私の声を確認してピタリと止  
まった。「マロ、来い！ ここだ  
よ」と行き過ぎないように夢中で  
呼ぶと、マロ号は中峰から一気に  
小沢に下り、私たちがいる所まで  
戻って来た。

「よし、よし、どうなった、マ  
ロ！」と頭を撫でようとした時、  
すぐに近くで猪を探していたヨシ  
号とシロ号の所に飛んで行った。  
しばらく何かガサガサとやってい  
たようだが、マロ号は二頭の先頭  
になって小沢に下りて、戻って来  
た中峰に登っているのだ。

「北嶋さん、マロは私たちを迎  
えに来たんだよ」と言うと、「そう  
だね。マロは凄い」と北嶋氏は感  
心している。そして、決断したよ



「マロ号、シロ号、ヨシ号、ありがとう」。  
撃ち止めがきまり、一番うれしい瞬間である

ヨシ号、ブル号の強烈な咬み止め芸。頭に咬みを入れる2頭の「咬み一番犬」が一緒に食い下がると、猪は動けなくなる。単独狩でも猪の獲れる一流芸である



うに「田宮さん、俺は犬たちを追って先回りします」と言うので、「目標地点はさっきマロが止まっていた場所だよ」と告げたが、もう彼は走り出していた。その後ろ姿に、「俺は犬たちの後を、どこまでも追うからな」と大声で叫んで、急な崖を下の大沢に向かって追跡を開始した。

ここで注意しなければならぬ大事なことは、犬群の主人。つまり犬持ちは、どんな難所であろうと、必ず猪を追っている犬群の後を正確に追い続けることである。そうすることで、犬群は主人が後から来ているという安心感で、どこまでも追って止め切るのである。

辛いから、難儀だからといって、犬たちの後を正確に追わないで、追いやすい所を選びながら大きく回ったりすると、犬たちは主人を捜しに必ず戻って来るものである。

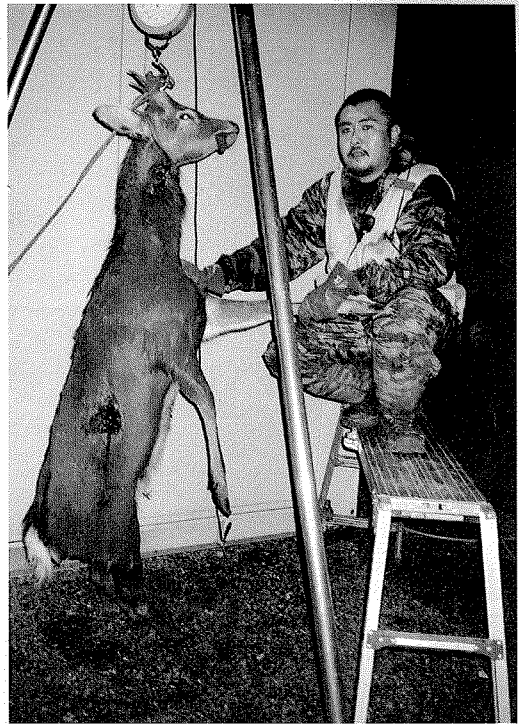
私は必死で小沢を登って、小峰をいくつも越え、犬たちを必死に追った。小沢の粘土に残されているのは小物の足跡だが、その跡の

上には確かに三頭の犬たちの足跡が乗っている。その足跡が大峰に向かって登っている。

「よし、もう少しだ、頑張り」と、独り言のように自分に檄を飛ばして汗びっしょりで急坂を登っている、取れなかった無線が急に鳴り始めた。

「一番です。どうぞ」と言つと、「獲った！ 獲ったぞ」と北嶋氏が叫んでいる。銃声がしなかったので、「どうなったのか」と念を押すと、「刺した。刺しました！」と大喜びである。私は「それは良かった。本当に良かった」と言つて心からほっとした。「犬たちが猪から離れない。早く来てほしい」と言うので、タツの二人に「タツを引き揚げて車で止めた現場に来るように」と告げた。

今猟期初めて北嶋氏が猪を仕留めたことで、私は何よりもうれしかった。夢中で沢を登って小峰をいくつも越えて、やっとのことで現場にたどり着いた。犬たちをそばの木に繋いで猪の刺し味に浸りながら、犬たちに声をかけ褒めちぎった。



千葉でも多くなってきたシカも良い体なのに痩せていて、大きいはずの角さえも落ちたきりで、生え替わっていない

止め現場は、二〇がもある崖下の小沢が始まる一番奥の谷で、大きな杉の根元である。マロ号が追い込んだ場所は小峰が多くあり、どの峰もこの谷に集まる攻めの要のような所である。小峰で囲まれた谷底のため何度も無線で声を交わし、また肉声で叫んで確認したが、平野氏たちはまだ来ていない。

「やりました！」と崖上を指さしながら、「あの崖を犬たちが猪と一緒に咬み落ちるので、夢中で飛び下りてここでやっとな刺しました」と笑顔で説明してくれるが、こんな難所で本当によく追いついたものだ、その成長に感心していた。

上の峰から「オーイ、どこだ！」と怒鳴っている平野氏の声がして、板東氏とうれしそうに下りて来た。止め現場では、勝ち戦話で盛り上がっている。私は「この場所、この山で一番のタツ場だよ」と告げていた。

獲れた猪は五〇\*ほどの小物だったが、この苦戦の中での見るべきところの多い、大物よりはるかに大きい感動の勝利だった。絶対の自信を持っていたが、猪の居場所が変わったり、猛暑の影響で猪の脂肪(白身)がなくなること、減量した猪の逃げ足は考えられないくらい速さと遠走りで、なかなか止めづらく、撃ち獲りにくくなっている。

### 今猟期の戦法

その上、猪が少なくなったので、同じ猪を各グループがいつも追い立てることにになり、追われなれて獲りにくくなっている。そのため、どのグループも猪が獲れないと嘆いているのである。

もうすぐ頂点だと思っていた今猟期に、追われなれた猪がどのように変身するのか、そのグレ猪にどう対処するのか、そして、どこまでも逃げる猪に犬たちがどんな追い込みをかけるかなど、よく見て実態を知ることである。

そんな不可能を可能にするには、当然のことだが、同じことを同じ場所で何度でも繰り返す、その成り行きを忠実に再現してよく見て、勝つための緻密な対策をやり通すことなのである。

昨日も同じ猪を全く同じ場所まで追い、Uターンさせて同じタツを行きも帰りも通過しているのがある。

山彦会千葉支部でも、現実には考えられないような現場の変化が起こったので焦ったと思うし、自信をなくした者が出て経験不足で仕方なかったのである。しかしながら、我慢して絶対に諦めないでやり続けていけば、進むべき道は自ずと開かれるものである。

千葉の山では大藪の中を逃げるので、タツは撃ちにくい。特に今年には猛暑で猪が変身しているの、本来、六〇\*の猪が五〇\*くらいに、一〇〇\*なら八〇\*くらいに減量しているので、とてつ

「よくやってくれたね、北嶋さんよ。今期はこんな戦法が主流になると思うが、どうかこの突破口

の激戦を忘れないでほしいと思  
う。この小猪を見事に刺し止めら  
れたのだから、大物だって必ず完  
勝できるはずだ。どんな難題に突  
き当たろうが、必ず俺がやってみ  
せるから、どうか性根を据えて追  
って来てくれ」。そう祈らずには  
いられなかった。

平野氏と板東氏には山の上に置  
いてある車を回して、この大沢の  
入り口に来るように頼んだ。北嶋  
氏は小川の中を一人で猪を引き出  
しているが、獲れたら大変だと言  
っていただけに、さぞかし苦言の  
一つくらい出ると思ったが、私を  
氣遣って、「田宮さんは犬たちを  
引いて来てください」と実に爽や  
かなものである。

すぐ後に続くと、犬たちが猪に  
咬みついて引き出せないと思い、  
三十分くらい待って北嶋氏が「出  
口に着いたよ」という合図で、犬  
たちを放して後に続いた。犬たち  
は途中から反対側の山に跳び込ん  
だと思ったら、またしても猪を止  
めている。北嶋氏が二〇〇メートル  
先の小沢を目掛けてぶっ飛んで  
行った。

私は小道の両側に広がる田んぼ  
の畔からその様子を見ていると、  
犬たちの絡み鳴きが聞こえた。も  
う北嶋氏の目の前である。「これ  
はまた、いただきます」とニヤニヤ  
して見ていると、竹交じりの杉林  
で猪は北嶋氏の寄り付きに気付い  
たようで、大藪の出峰の下を横切  
って、あつていう間に田んぼのす  
ぐ上に来た。よし、来たと畔を走  
って銃を構えるが、目の前だとい  
うのに犬たちの追鳴きだけが凄  
い勢いで通り過ぎて行った。山肌  
一面が千葉特有の大藪なので二、  
三〇〇先をバリバリ走っている猪  
が全く見えないのである。

私は小道を全力で走り、何とか  
して先回りしようとするが、当然  
のことながら飛び出したばかりの  
猪と並走したところで先回りが決  
められるわけもない。とうとう小  
道の出口まで猪に逃げられ、それ  
を追ったシロ号が県道に出てしま  
った。県道は車の通りが多く危険  
なので、猪を追うのを諦めて慌て  
てシロ号を呼び戻した。

シロ号はすぐに私の声に反応  
し、帰って来ることができた。猪

犬の訓練は猪猟に関するものだけ  
でなく、民家や道路などの危険な  
個所への接近時とか、思いどおり  
の狩り込みをするために絶対に教  
えておかねばならないことが、緊  
急の呼び戻しなのである。

主人が後を追って来なければ、  
犬たちは主人の居場所の確認や迎  
えに来るようになるまで引き綱に  
よって繰り返して教え込み、いざ  
という時に常に心がけて備えてお  
くことが大切なことである。

シロ号を綱で引き、北嶋氏の待  
つ所に行くと、平野氏が小川の中  
で猪の腸抜きの中である。氣に  
なってGPSで犬たちの動きを見  
ると、猪は北嶋氏が刺し止めた方  
向に戻ったようで、犬たちは大峰  
を県道ぎりぎりに回って、私たち  
の真上辺りから追うのを止めて全  
犬が帰って来た。

一見こんな何でもない帰り方  
が、実は猪犬では大事な一芸なの  
である。この一芸がなければ、追  
いたくないシカとかカモシカなど  
の多くいる山梨や群馬の猟場では  
通用しない。シカだらけの山中か  
ら、猪だけを狩るといふ極限の芸

当ができる犬群でなければ、思い  
どおりの猪猟などできないのであ  
る。

### 見事な猪の変身術

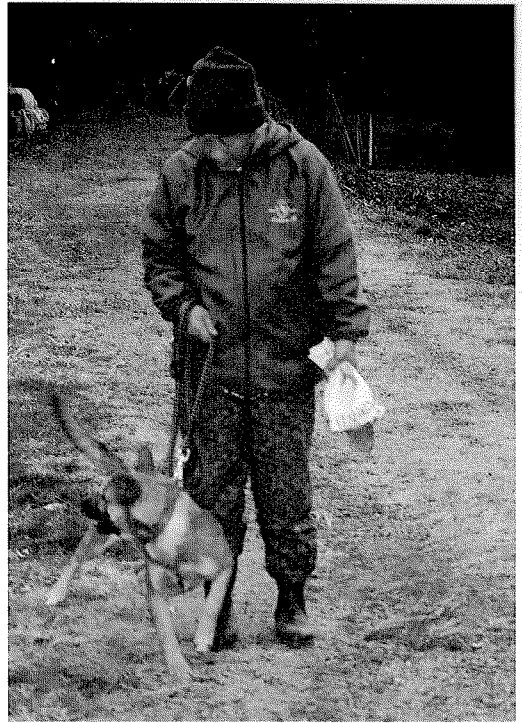
ちなみに、わが犬舎の一流犬群  
であればシカを追った場合でも、  
その場でどっかと座り水でも飲み  
ながら待っていると、二十分くら  
いを目途に全犬が待っている場所  
に帰って来る。つまり、主人が追  
うことをやめれば全犬が主人を案  
じて必ず帰って来るのだ。

逆に、猪は必ず獲るといふ氣で  
犬たちの後に続けば、犬たちは決  
して諦めずに二時間でも三時間  
も追い続けて、その先で必ず止め  
切るのである。

こうした芸当ができなければ、  
これからの猪猟での一流猪犬とは  
いえない時代になってきたし、良  
い成果にも繋がらないのである。

今猟期のように猟場に猪がいな  
かったことや、猪を止められない現  
実は、気候と状況に見事に反応し  
た猪様の変身術であった。「おか  
しい」「何でだろう？」は、猪様が





ママの愛で猪犬になったリキ号(二代目)。獵犬の訓練など何も知らない妻が、寒さで全滅した仔犬の中で1頭だけ生き残ったリキ号を「私が綱引きする」と、朝夕毎日頑張ったお陰で立派な猪犬になった

追われなれて減量することによってとてつもなく強くなり、逃げ足も速く遠くまで一目散に飛ぶようになってきていることを理解できなかったことである。また、犬群も私もその対策に一カ月近くかかってしまったということである。

何事も物事の成功や完成は、その妨げとなっている原因の究明であり、まずそれを克服することである。今獵期はそんな入り口にあった。こうした難題を犬たちと一緒に一つひとつ拾って実戦で鍛え上げてきた。

そして、やっとのことで、変身

猪に対応できる猪犬群の進化した咬み止め芸で見事に完勝できるまでになったのである。

このことは頂点付近の思わぬ回り道のようなものであるが、現実問題としては、さらなる上を目指す猪獵法の改革であり、猪獵の奥にある神髄を知ったことでもある。この試練の克服は、まさに猪の改良であり、前進であった。

今回の北嶋氏の小猪の刺し止めは、グレードアップしたこれからの猪獵に道筋を示す上でまさに大勝利である。こんな大勝負にも堂々と、私がこだわって教え示

てきた刺し止めの完勝であったところにその意義を感じ、心からうれいのである。

長く獲れなくて、何でだろう？を話題にして飲むビールより、やはり獲れて喜び合ってワイワイやるビールのほうがいい。私は「獲れてよし、獲れずまたよし」を猪獵の信条としてきているが、そんなきれいごとを押し通せるのは、単独獵の世界だけである。

グループ獵では猪が獲れないと元気がなくなるのは当たり前で保てなくなるのも仕方ないことである。

反対に、猪さえ獲れば、苦労や疲れも忘れるもので、格別な気分になり、ビールも焼き肉もうまい。当然、会話も盛り上がって、先に撃ぎたい大事な獵談でも気兼ねなく話せるようになる。

私はやっとな巡ってきた苦労の小猪獲りによって、持ち前の根性には火をつけて、改めて今獵期の目標を立て直した。昨獵期にやり残したことを、この一秋で必ずできるようにする。ただそれだけの目的

を一步ずつ前進させ、誰もできない神業級のとてつもない猪犬獵の完成にグレードアップさせることである。

そんな極限の対応をとっていかないと、今獵期のような猛暑などの自然環境によって進化し、とてつもなく変身している猛者には勝てないのである。こんな環境の変化がなくても、千葉の獵場では山々が低く、大藪続きで並みの猪犬では猪は止められないのである。

具体的には、犬たちが近づくと早立ちして、逃げ一手の小物(約九〇<sup>+</sup>)の後を犬たちはどこまでも追って行き、犬たちが猪を止め切るのを持って勝負することになる。その勝負の決め手は、前述のとおりで、止め猪への寄り付きとできる限り近寄っての刺し止め撃ちである。

一方、一〇〇<sup>+</sup>以上の大物は、例外なく大藪の中や大木の根元や

### ゼットハンターフード

1袋10kg 2650円

ドッグフード1袋が全獵を支えます

ドッグフードのご注文は全獵へ!

水のない滝壺で尻を守るように陣取りすぐに止まるが、これが反撃の合図で、犬たちを突きまくり、切り殺そうと荒れ狂うのが常である。

小物でも大猪でも、基本的には一流犬群による咬み止め現場での対策は全く同じである。

つまり、前記の止めた猪に対する素早い寄り付きと、激戦の中でせわしく動き回る犬たちを銃口で交わして、確実に一発で猪を射止めるためには、五〇センチ〜三〇センチで撃つ近射の極意が必要であるが、現実的には恐ろしいまでの猪猟法である。

一見すれば、この安全安心に逆行する無謀なまでの猪猟法を上級編の支柱に据えている。これを今猟期に実戦の中で最大限の注意を払って推し進め、特訓で何度も繰り返し、簡単にできるようなるまで鍛錬して、頂点までの礎としたいと思っていた。

なぜ、この猪猟法にこだわり、くどいまで力説しなければならぬ理由は、一流止め犬群による最高の猪止め現場は何もかもが想定

外の恐ろしさで、実戦を重ねた猪猟人であっても安易な寄り付きはとて危険だからである。

私が推し進める猪猟の醍醐味や猪犬の咬み止め芸の極地は、立ち塞がる危険や難題を自らの努力と挑戦で見事に乗り越えないことには決して味わえないのである。

そんな猪猟法をあえて推し進めるのは、私が今までにやってきて、この攻め方（猪猟法）が一番良い止め猪対策だと思っているからであり、強烈な止め芸に対する主人として果たせる最高の安全策であると信じているからである。

さらに重要なことは、一流咬み止め犬群で、どんな猪でも力で押し伏せる強烈な咬み止め芸と刺し止め撃ちがなければ、単独猟や二、三人猟で猪は獲ることはできないのである。

誰もが感激し納得できる本物の猪止め猟を推し進めたり、一流猪犬群による完璧な咬み止め芸に対応できる最良の安全対策は、前述のとおり止め猪への寄り付き方法と、近くから一発で仕留められる

射撃技術の鍛錬である。さらに上級編で学ぶべきことは、前記の実戦技術をがっちりサポートして、精神的に揺るぎないものとすることである。それが度胸であり根性であると思うのだ。

頂点付近の激戦では、どの技術が欠けても歴戦の大猪に完勝することはできないのである。たかが猪猟であっても、上級編ともなればすべて極めなければならぬのは、猪猟技術や犬芸の極致である。

侮るなかれ、挑戦すべき頂点までの事項は実に多岐にわたるので、突き当たる難題には実戦で繰り返し戦って一歩ずつ極めて頂点に立つのが、この一秋に掲げた目的である。

何事でも、最高の夢を追ったり共通の目的に向かって一緒に挑戦する仲間を持つことは大切なことで、人生至上の喜びであり、心より感謝しているところである。

(つづく)



## 猟装に注意

目立つ色の帽子と  
ベストを必ず着用のこと  
迷彩色・迷彩帽は着用しないこと